

ファミリー・ホスピス かわら版

令和3年
2月号
(2021年)

はじめに

日頃より大変お世話になっております。ホスピス・緩和ケアの品質管理を担当しています梅田と申します。多職種に向けた教育に活用しております『ELNEC』教育プログラムから、いち項目ずつ紹介させていただきたいと思っております。

今回は、モジュール1「エンド・オブ・ライフ・ケアにおける看護」です。緩和ケアやホスピスケアの概念や用語、そしてこのようなケアが求められる



日本ホスピスホールディングス(株)
執行役員 事業本部 品質管理責任者
梅田 恵 (がん看護専門看護師)

これまで昭和大学病院の緩和ケアチーム、昭和大学保健医療学部のがん看護専門看護師コースを担当してきました。どこにいても質の高い緩和ケアが受けられる、一人一人の尊厳が守られるコミュニケーションをめざし、この4月より現職に着任

る社会背景や基本姿勢について考えるモジュールです。題名は「看護」となっていますが、ホスピスに携わる全てのスタッフや利用者に理解していただきたい内容になっています。職種に関わらず関心をもっていただければ嬉しいです。

エンド・オブ・ライフに 関連する用語

「終末期ケア」「ターミナルケア」「ホスピス」「緩和ケア」など、これまで耳にされてきたのではないのでしょうか。1970年代、まだ、がんが未知の病であり、痛みの緩和方法が未確立であった頃、この分野は動き始めました。死が免れない状況にあっても、最期の時まで人として尊厳を保つために、さまざまな苦痛緩和への手を尽くすチームアプローチとして、ホスピス・緩和ケアは発展してきました。当初は、進行がんの最期の数か月の取り組みでした。しかし、がん治療の発

達や高齢化を背景に、疾患を問わず、最期が想定される年単位の取り組みに広がってきています。

日本では、早くから保険診療に緩和ケア病棟算算が取り入れられ、緩和ケア病棟でのケアのイメージが強いかもしれませんが、そもそも、人の暮らしの中にある「看取り」や、その人しか表現できない主観である痛み(症状)への対策は、暮らす地域でのケアに含まれるべきでしょう。最近では、対象や時期の広がりなど意識し、「エンド・オブ・ライフ・ケア」と表現されることが増えていきます。

ホスピス・緩和ケアと 社会背景

ご存知のように、急速に少子高齢化、そして多死社会を迎えています。七〇年前に六〇歳だった平均寿命は八〇歳を超え、九〇歳に届く勢いです。また、その頃、七割であった在宅での看取りが、今では病院が八割になりました。高齢化率も五倍以上の二十八%、四人に一人が六五歳以上です。

このような社会の変化を背景として、

今、看取りを迎える方やそのご家族は、少ない体験のなか、療養の場や過ごし方の選択を迫られています。致命的な病状について説明を受けるようになったのも、ここ二十年ぐらいです。看取りについて考えたり、話し合う経験は、多くの方にとって初めてで、経験したことはない感情の動きに惑っているかもしれません。ケア提供者にとっても同じです。

「死を考えるのはよくないこと」とする文化もあります。しかし、自分らしく、自分の願う最期を迎えるためには、考えないで、誰とも話し合わないではいられません。看取りに向き合う新たな文化が醸成される豊かな時代にいます。

だから、ホスピス・緩和ケアをさまざまな立場にある人と語り、学び取り組むことが、とても大切なのだと思っています。

ELNEC-J
(End of Life Education Consortium JAPAN)
<https://www.jspm.ne.jp/elne/>

ファミリー・ホスピス 東林間ハウス

「コロナ禍で迎える

「クリスマス演奏会」

ご入居中の利用者様にハーモニカ演奏を趣味とされている方がいらっしやいます。「ご本人の希望を叶えるための「らいふプラン」の取組みとして、担当者が中心となり、ご本人と準備を重ね、クリスマス演奏会を開催することが出来ました。以前にご友人と演奏を聞きに行かれた事がきっかけで始めたハーモニカでしたが、すっかりのめり込んでしまいが、十年間ほど小学校や老人ホーム等に慰問演奏をされていたほどの熱の入れようだったそうです。



「らいふプラン」

“自分らしく”生活していただくため、ご本人のご希望をお聞きし、皆で実現に向けて取り組むファミリー・ホスピス独自のサービスです。



曲の構成は、ご本人が考えた渾身の9曲です。

♪冬景色、しゃぼん玉、星の世界、
かたただき、背くらへ、きよい
の夜、お正月、ふるさと♪

コロナ禍ですので、事前に参加者の体調チェックや感染対策を行いながらの開催となりました。

演奏会の当日は、飛沫に配慮し

パーティーションを設置、ハーモニカの素敵な音色がハウス中に響き、参加された皆さんもマスク越しに口ずさんでおられました。コロナ禍で自由な外出が難しい状況の入居者様に

とって、ほっこりとするひと時」

なったと思います。演奏されたご本人は、「楽しかった。また、春には春の歌を、夏には夏の歌を歌いましょう」とお話しされ、参加された皆さんからも次回の開催を楽しみとの声が多く聞かれました。

現在のご本人は、更に前向きになられた様子で「自分の力で歩く！」と歩行訓練に励んでおられます。

「東林間ハウスのお正月」



『皆さんの

今年の抱負は何ですか？』

東林間ハウスでは、入居中の皆様が書かれた今年の抱負をダイニングに貼りだしています。

「コロナの収束」、「痛みがないように」、「人の役に立つ」、「百歳

まで生きるぞー!」、「早く自分で

立って動けるように」、「今日あることをありがたく、明日の事は云うなかれ」などなど、思い思いの言葉で書かれています。皆さんの願いが叶いますように…

【編集後記】

ファミリー・ホスピスは、「良く笑い、良く生きる為のホスピス」です。介護・看護・住宅職員等それぞれの専門性を発揮し、入居者さまがその人らしく生きる事を支援してまいります。

入居者様・ご家族様・職員、ケアマネージャー、往診医等々の相互連携により、笑顔が生まれ、病気を抱えながらも充実した日々となるよう職員一同取り組んでおります。

皆様、お近くにお越しの際にはお気軽にお立ち寄りください。

(記 センター長代行・中島)

